

科学と多様性

北原 和夫
国際基督教大学(ICU)

堀 裕和
山梨大学工学部

「知の共有」は、一人一人の研鑽の努力を学問の発展にし、知を力たらしめるところのものであり、科学の本質である。知の共有を労力を費やして選択すべき価値であるとみとめ、互いに異なることを認めあう多様な集団において、知を共有しようとする意志をもち、それにともなう困難を克服する努力がなされることが重要である。『ICUの国際化について』[1]、『科学と多様性』[2]の二つの文章に基づき、多様性こそ文化創造のための必要条件であるという確信について述べた。

あわせて、シュレーディンガーの著作「生命とは何か」の50周年記念講演会抄録[3]における、多様性の意味についてのさまざまな考えを紹介した。私たち人が、神経パルスの中にコード化された内部言語を形式化する能力によって言語と創造性を獲得し、広い空間と時間の領域にわたって情報を伝達できることによって特徴付けられること、また、生命は、基本的性質として、豊かさ、多様さ、複雑さを持つと同時に、平衡から離れた系の自己組織化に固有な性質として選択を生じ、選択による単一化がカタストロフィをもたらす可能性をもつことなどの観点から、多様性のもつさまざまな意味を考察した。

異なる人格、異なる性、異なる人種、異なる文化が共存するところが、発想の豊かさを獲得できるところであり、多様性の欠如は、知の共有の狭さに対する直観的な危機感を生む。そしてまた、非均質性が生み出す文化の価値を尊ぶゆえに選択した多様性という価値は、単一なものから構成される集団における狭い意味の効率を重視し、言語、文化、感性の異質性が生み出す厄介さを厭えば失われるであろう。多様な知の共有の形態を持つことが、「知的社会性」から見た価値ではないだろうか。時間と手間をかけることによって、知的社会性を促進する環境の整備をするべきであると考ええる。

参考

- [1] 科学と多様性：北原 和夫。
- [2] ICUの国際化について：北原 和夫。
- [3] 「生命とは何か」 それからの50年：M.P.マーフィー，L.A.J.オニール共編，(堀 裕和，吉岡 亨共訳，培風館，2001)。
- [4] 物理の教育と相補性：堀 裕和，大学の物理教育 1998-2 (1998) 21-24。

『科学と多様性』

ICU 北原和夫

現在所属している国際基督教大学の理学科では、男子学生と女子学生の比はほぼ同じで、若干男子学生が多い。教員は25名中、5人が女性、また、5人が外国人である。物理専修学生は学年によって人数が変動するが、30%位は女子学生である。おそらく他の男女共学の大学の理学部に比べたら、学生、教員ともに女性の割合は格段に高いのではないか、と思われる。ICUにきて、3年経ったが、女性が多く、また外国人教員も少なからずいるという環境に慣れてくると、逆に日本の他の大学、研究機関を訪ねたときに、何か「単調さ」を感じるのである。確かに、均質のほう効率がよいのだが、発想の飛躍ということに乏しいのではないか、と思うのである。

今回のWomen in Physicsに関わってきて、始めは女性をめぐる不平等、偏見、差別が問題であると考えていたのであるが、男女の相違の意義が生かされていないことも問題ではないか、と